見ごろ・食べごろ人類学

ベトナムのままごと

比留間 洋一
（ひるま よういち）
静岡県立大学大学院助手

売り買いのままごと

うだるように蒸し暑い二〇〇〇年六月の午前。サム婆さんは出かけて、家の入り口では三歳の孫一人が白いチョークで階段に落書きをしている。門の内側の木陰では、隣家にすむ一二歳の男の子トーが、いつものサッカーのユニホーム姿で、莫蓆のうえに、くつろいだ様子で腰をおろし、一歳の姪の遊び相手になっている。

ここは田んぼと灌漑水路がしきつめられたデルタのなかに立地している、約四〇〇戸からなるハノイ近郊の農村。現在ではテレビもバイクも、一家に一台ほどは普及している。近年、どこの村でも二、三階建ての白亜欧風の新しい家が目立つようになってきたが、この村はまだ一〇軒に一軒くらい。ほとんどが、煉瓦の壁にモルタル塗りで瓦葺きの平屋である。

ハノイ近郊の村、イエンサー

村の中央にある集会所

この日、わたしははじめて「チョーイドーハン」をトーから知った。チョーイドーハンとは商品を売り買いするままごと遊びのことである。

「これはクックタン。ダインゾーができるんだ」と言って、トーはサム婆さんの生け垣の細かな葉を選ってもぎとり、また大小の葉がついた別種類の草の茎を折る。クックタンとはヒヒラギキクという和名をもつキク科の草、ダインゾーとは、ひりひりと熱くなる物質を体に擦り込んで風邪を治す民間療法のことである。薬草売りのつもりである。

今度は、ハイビスカスの赤い蕾と、生け垣付近に転がるレンガを拾ってきた。手早く、草花と煉瓦を配置していく。まるで使い慣れた台所で料理をするかのようであろうか。

レンガの上で、枚の葉を小刀で細くきざむと、それを木の葉のお皿にのせた。

「ご飯だよ」とトー。

「おもしろいねえ」とわたし。

次は真っ赤なハイビスカスの蕾を薄く切って「ご飯」にのせる。「トウガラシ」だという。

「あとは箸だ」と、すぐ近くに生えている竹の小枝を適当な長さにして、その先をレンガにこすりつけてきれいにする。そして、ご飯と箸をわたしたち夫婦に差し出しながら、「買いなよ」「いくらで買うかね？」と商人風に声をかける。

ベトナム商店よろしく値段交渉も必要である。「お金」にする葉は、大きい順に二〇〇〇ドン、一〇〇〇、二〇〇というように決まっている。重さを天秤で量るそぶりもする。ほかに、肉としてトウガンの黄色い花、空心菜は池に生えている実物を利用した。

チョーイドーハンの赤、黄、緑のあざやかな色合いに心を奪われた。

村じゅう、商品だらけ

感興をそそられて、後日、村で何人かに聞いてみた。どの草花を何に見立てるかはだいたい一致しているらしいことがわかってきた。小学高学年の女の子が、訳知り顔で教えてくれた。

――クックタン、ホテイアオイ、ザウゴ（和名アマメシバ）が葉野菜。子どもたちがその蜜を吸うハイビスカスは、トウガラシ。トウガンの花は鶏卵。ニョ二ヨイ（キク科のタカサブロウ）の葉は調味料。バラ科のガンの葉がお金。黄色がかった糸くずを拾ってきて春雨と見立てたり、ホテイアオイを薄く切って大きなフランスパンをつくったりもする。

一九歳の女性は次のように教えてくれた。

――ハイビスカスに似た紫色の野生の花がズオック。ズオックとは、ブタの干し肉をさいた、ご飯にかけるふりかけである。トウガンの花が卵焼き。池のホテイアオイは、葉を切り落とし、茎をブタ肉に見立てる。ホテイアオイはブタの餌になるので、これをブタに見立てるのではないかと思う。ハイビスカスは水に一、二時間つけておくと、色素が抜けて薄ピンクになる。これを脂身に見立てて、薄くスライス。やはりガンの葉はお金。葉が大きいほど高額である。だから大きな葉を好んで探しに行った。ご飯はない。市場にご飯を売る人などいないからだという。レンガを拾ってきて家も建てる。レンガをちょっと積んだだけの小さなものである。

自然景観と子どもの遊び

ベトナム民俗学は、子どもの遊びについて数多く収集してきた。その集大成が、八〇〇頁にもおよぶ大著『ベト人の子どもの童謡と遊び』（ベトナム民間文化研究院、一九九六年）。これに紹介されている一〇六種もの遊びのなかに、なぜかチョーイドーハンはない。しかし、わたしはこれは子どもたちにとってかなりあたりまえの遊び、との印象を抱いている。

子どもたちの遊びの代表的なものとして、ほかに次のようなものがある。竹ひごを使った手づくりの凧揚げ、村の井戸での魚釣り、草をオンドリに見立てたチョイ（闘い）とよばれる闘鶏ごっこ、池でのタニシとり、タットカーという伝統的な漁法による魚捕り、田んぼでのネズミ捕り、パチンコでの鳥撃ち、懐中電灯で照らし手づかみする夜のカエル捕りなどである。

村の中央に集会所があり、その前には広場と池、また水路が縦横に張り巡らされ、生け垣が家々を区切っている。こうした自然景観と、子どもたちの遊びの豊かさは深い結びつきをもっている。まさに、村の生物の多様性が、子どもの遊び文化の多様性とも対応しているのである。

このことを、わたしはとりわけトーから多く教えられた。学校ではうだつがあがらないようであったが、近所で遊んだり、田んぼで水牛追っているときのトーには活気がみなぎっていた。彼の家にはバイクもなく貧しかったが、家族は感性豊かであった。

あれから五年。村から届く手紙には、その外観は大きくドイモイ（様変わり）した、とある。おそらく都市化が進み、生け垣はコンクリートにかわり、水路や池も埋め立てられ、高層の新宅が立て込んでいるのだろう。遊びを通してトーが内面化してきた村世界の多彩さを、はたして今の少年少女たちはどれほど受け継いでいるのだろうか。子どもたちにとって村が遊びの宝庫であり続けてほしいと願っている。

チョーイドーハンに興ずる子どもたち

草花でつくったオムレツ

田んぼの排水溝に堰をつくって水を掻き出す漁法をタットカーとよぶ